

# 益田池碑銘

須田哲夫

## 1. 益田池碑銘文

大和の州益田の池の碑の銘 序を并せたり

沙門遍照金剛文 書を并せたり

若し夫れ、感星（五穀をつかさどり、五穀に水をそそぐ池。空海の草稿には「感」は「威」とあったという。）銀漢（天の河）、下し灑ぐ（地上にそそぎ、万物を育てるはたらき。）功深し。湖水天地（大海）、上り潤す（地上のものをうるおしそでるめぐみ。）徳普し。故に能く中弁（生育するすべての草。）之に因り鬱茂（繁茂。）なり。蟲卵之に頼り長生す。八氣（天地の八方のすみの気で寒暑を出すという。）播植し、五才（金・木・水・火・土の五行。）陶冶（五才によって造りあげること。）するが若きに至っては、北方の行（北方は水の方角に当る故、水のはたらき。）偏へに其の最（第一。）に居り。坎（北方の水の徳。）の徳たること、遠い（ひろいこと。）かな。皇い（広大。）なるかな。

粵に益田の池有り。両の尊（伊弉諾尊・伊弉冉尊。）鼻子の洲（大八派。）、八鳥（八咫鳥）初めて道くの国なり。地は是れ漢語（人名で伝不祥。）が舊宅。號は村井の故き名なり。去むじ弘仁十三年（822年。）仲冬の月（十一月。）、前の和州の監察藤納言（和泉国を管掌した監察官。納言は太政官名。藤原緒嗣または藤原三守。）紀大守末（紀州国の長官である紀末成。のちに越前に移る。）等、元陽（日照をふせぐこと。）の支ふべきを慮りて膏腴（地味肥沃で、作物を多く産出する土地。）の未だ開けざるを歎く。斯の勝處（すぐれた所、即ち貯水地に適した土地。）を占めて之を奏し扱ふに綸詔（みことのみこと。）即ち應ず。爰に藤紀二公（藤原氏と紀氏。）及び圓律師（真円律師かといわれる。）等をして功を勅むること（仕事を開始させた。）未だ幾ばくならざるに、皇帝（嵯峨天皇。）、汾襄（太上皇の宮。）に遊駕（いでまし。）したまひぬ。藤公之に従って職を辭す。紀守も越前（福井県。）に遷る。今上（淳和天皇。）、堯の揖讓に膺って（堯

帝が礼をつくして帝位をゆずった故事。ここでは、嵯峨帝が淳和帝に讓位されたこと。）舜の寶圖を取す（舜の宝とすべき国王をおさめた。）。玉燭（天皇の威光。）を二儀（天地。）に照かにし、赤子（万民。）を八嶋（大八洲。）に撫づ（いつくしみやしなう。）。伴平章事（大伴国道のこと。）國を簡むで代って國の事を檢へしむ（たださせたり。）。竝びに藤廣（藤原藤広。大和守。）を抜でて刺史（國の守り。）に任ず。両公池の事を檢校（点檢。）す。ここにして青鳧（金錢。）塊を引いて、數千の馬日に聚る。赤馬（車。）人を駟りて、百計（いろいろのはかりごとをする工夫。）の夫夜集る。既にして車馬轟轟（車輪のとどろきわたるさま。）として電（すみやかに往來すること。）のごとくに往き、男女礮礮（雷の鳴りとどろくさま。）として轟（雷の本字。）のごとくに歸る。土雰雰（雪の降るさま。）として雪のごとくに積り、堤倏忽（たちまち。）として雲のごとくに騰る。宛も（さながらに。）靈神（靈驗あらたかな神。）の埴（ねば土をねって器をつくる。）を埴（こねてやわらかにする。）すが如し。還って洪爐（大炉。）の化産（化生。）するかと疑ふ。成ること日あらず（やがて。）畢うること年（わずかの年月。）あらず。之を造るは人なり。之を辨ずるは（あきらかにする。）天（造化の神。）なり。爾して乃ち池の狀たる、龍寺（竜蓋寺、今の岡寺。）左にす、鳥の陵（綏靖天皇陵 桃花鳥田丘上陵。また白鳥の陵。）を右にす。大墓（大野の墓、平郡にありという。）南に聳け、畝傍（畝傍山）北に峙てり。來眼の精舎（久米寺。）其の良（東北方。）に鎮めたり、武避（宣化天皇陵身狭桃花鳥坂上陵。）の荒蕪其の坤（西南方。）を押せり（おさめる。）。十餘の大なる陵（大きな墓地。神武・綏靖・安寧・懿徳・欽明・文武などの各天皇の墓。）聯綿として虎のごとく（地勢の雄大な形容。）に踞り、四面の長き阜（丘地。）遷遷として（斜めに連なるさま。）龍のごとくに臥す。雲松嶺の上に蕩し（動くさま。）、水檜の隈（水のほとりに檜木などが生えている隈。）の下に激す

(水が岩などにあたって激しく波うつこと)。春の繡ぬひもの (春の花に喩える。)池に映じて観る者歸ることを忘れ、秋の錦(秋の紅葉を喩える。)林に開けて遊人倦えんまず。鴛鴦(おしどり。)鳧鴨(カモ。)水に戯れて歌を奏し、玄鶴(老いた黒鶴。)黄鶴(白鳥。)汀に遊ぶで争ひ舞ふ。龜鼈頸を延べ、鮒鯉(フナ・コイ。)尾を掉かす。淵瀨(淵瀨にいるカワウソ。)魚を祭り、林鳥哺を反す(林中のカラスの子は、親鳥に養育の恩を返している。)積水(湖水。)天を含み、疊める山、景を倒にせるが如きに泊むでは、深きこと海に似たり、廣きこと淮(中国西北区雲南省昆明の南方にある大湖。)に超えたり。昆明の儔に非ざることを咲ひ、禰達(阿禰達池、広さ五十由旬。)の猶少きことを晒ける。虎嘯(虎がほえると風が立つといわれるのによる。)涛を鼓するとき、驚汰(荒波。)漢(天。)に波る。龍吟(竜がうたえば雲をよぶといわれるのによる。)堤を決るときは、谷與して(悠然たるさま。)飽かず。陵に裏る罔象(河竜また水神。)も其の塘(堤。)を溢すること得ず。山を焦す女魃(ひでり神。)も其の底を涸らすこと能くせず。六郡(未詳。)潤ひを蒙り、萬澗(無数の小さな流れ。)湯湯(さかんに流れるさま。)たり。一人(上一人。天皇。)慶(善き事。)有るときは兆民(多くの人民。)之を頼る(こうむる。)。舞し蹈して(手の舞い足の踏む所を知らざる意。)千箱(豊年。作物が千倉万車にみちること。)を詠じて腹を撃ち(いわゆる腹鼓を打つこと。)、手し、足して萬歳(慶辞を祝福することば。)を唱へて力(堯の壤父の故事を指す。)を忘る。蒼海(あおうなばら。桑畑となること。)の數變ずることを歎いて銘詞(碑銘のことば。)を余が筆に索む。貧道(空海の謙称。)不才(才能なきこと。)にして仁(のっぴきならない依頼)に當る。固辭すること能くせず。虚に課せ章を吐く(虚しい頭脳にしたがって文章を書いた。)。適ち銘(韻は萌・生・驚・横・時・起・始・似以下四言一句六篇。)を爲つて曰く、  
希夷1たる象帝2。一末3だ萌4さず盤古5出でざりしには國常6生ることを無し元氣7倏動8して葦牙9乍ちに驚く八風10扇鼓11して五才縦横12たり其一  
日月運轉して山河錯り14峙てり千名森羅として萬物雜り17起る藤膚18既に隠れて櫻杭19爰に始まる天地20人池21灑き22灑す功23似たり 其二

前堯後禹24慮り25厚くして人を恤む26 智略27廣く運むで慈悲28あつて且仁29あり機つる事測らず30 功を成すこと神31の若し物を潤すこと雨の如し人を榮すこと春に似たり 其三  
綸紵32雷のごとくに震うて有司33功を創む紀藤34草35を薙りて果續36圓かに豊かなり伴相37計を施し原守公38在り良才40奇術あつて民具風39に靡く41 其四  
爰42一の坎43と名く掘ることは人力なり成ることは天44より車馬霧45のごとくに聚り男女雲のごとくに連なれり歸き來ること子に似たり 功を畢ふること年あらず 其五  
深くして且廣し鏡48のごとくに徹して紺色49あり混糝50渺瀰51たり瞻望52する極り罔し百溪53の宗萬派54の職なり魚鳥涵泳55し虬龍55斯に匿る 其六  
吠澮57汎溢58して田畚59播殖60す莘61として我藝62う穰穰63として我籩64す坻65の如し京の如し兵66足り食足る井田67我事とす堯帝68何の力かあらむ 其七

- 1 道の本体、「老子」に見える。
- 2 帝に先だつて存すること。
- 3 「一」は天、「一」は地。
- 4 はたらきを見せないこと、天地未分の意。
- 5 天地万物の祖。
- 6 国常立尊(天地未分位の神)。
- 7 太元の一氣。
- 8 忽ちに動くさま。
- 9 葦の若芽。
- 10 炎・条・景・日・京・膠・麗・寒の八風。
- 11 扇ぎ、なりわたつて。
- 12 木・火・土・金・水の五行。
- 13 たてによこに、展開した。
- 14 入りまじっているさま。
- 15 無数の草木。
- 16 数かぎりなくならび連なるさま。
- 17 入りまじること。
- 18 「藤」「膚」いずれも品物の名。林藤と地皮餅。
- 19 穀物・粗末な食物で、藤膚の対。
- 20 大海。
- 21 益田池。

- 22 そそぎうるおすこと。  
 23 その偉大な働きは大海のそれにも似ているの意。  
 24 堯と禹のように、嵯峨帝が淳和帝に譲位したことを指す。  
 25 よく考える、人民を憂えること。  
 26 慈しむ。  
 27 才知すぐれた計略。  
 28 仏ボサツの慈愛。  
 29 いつくしみ。  
 30 万機のまつりごとは靈妙で測ることが出来ない。  
 31 靈妙なもの。  
 32 みことのり。「緯」はおおづな。  
 33 百官。  
 34 紀の太守と藤納言。  
 35 開拓すること。  
 36 功績。  
 37 平章事国道。  
 38 和州の太守。藤原藤広か。  
 39 「公」は事と同じ。  
 40 よき働き。妙なるわざ。  
 41 なびきふす。  
 42 北方、水の方。水の義、ここでは池のこと。  
 43 田地を益すとの意。  
 44 天子の徳。  
 45 無数に集ってくる形容。  
 46 子が親のところに来るように、よろこんで集って来て工事に従事した意。  
 47 わずかの年月。  
 48 鏡のように明らかにすみとおること。  
 49 あおいろ。  
 50 水の深くして広いこと。  
 51 水が限りなくひろがっているさま。  
 52 眺望、みわたすこと。  
 53 限りなく多くの沢の水が流れそそぐもとなっているもの。  
 54 無数の波が起こるもと。  
 55 かつは浮びかつはおよぐこと。遊泳。  
 56 角のある竜。みずち。  
 57 田間のみぞ。  
 58 水が溢れること。  
 59 あらた。「畚」は開拓して一年の田。「畚」は開拓して二、三年経た田。  
 60 播きつけて殖やすこと。

- 61 つとめて怠らぬさま。  
 62 種を植えること。  
 63 すくすくと苗のそだつさま。  
 64 収穫する。  
 65 「坻」は島。「京」は高いおか。小島のように丘のようにある収穫した穀物の豊かなさま。  
 66 国の守りを十分にし、生活を十分にする意。  
 67 井戸を掘って水を飲み、田を作って食うこと。天下の和平なさま。  
 68 わたしは堯帝に何の借もない意。泰平の世のさま。

以上、益田池碑銘文を述べたが、この文章は実に難解である。それは、古語を用い、故事来歴を多く使っているからである。空海は如何に多くの語彙を含蓄していたのか、驚くべきであり、文才に優れていたことを如実に示している。又、文意に誇張がある。そのことは、文を雄大ならしめている。大意を述べると次のようになる。

大海、湖水、天の河の恩恵は偉大である。これのため草木は茂り、虫や卵は生長する。寒暑があること、万物がふえはびこる八気が生ずることは、水の働きによることであり、北方の水の徳は誠に大きい。

ここに益田の池がある。大八洲にある。この地は、漢語が古くから所有していた土地で、古くから村井と称されていた。去る弘仁十三年十一月、前の和泉の国を管掌した監察官藤原緒嗣、紀州の長官である紀末成等は、日照のために、肥沃で作物の多く出来る土地が開けないのを歎いた。そこで最も貯水地に適した所を奏上したところがみことのりが下った。そこで藤原氏と紀氏の二氏及び真円律師が仕事を開始させたが、まもなく、嵯峨天皇は太上皇の宮としていでましになった。藤原氏は職を辞し、紀氏も福井県に遷ってしまった。淳和天皇は、嵯峨天皇から帝位を譲り受け、その威光を天地にあきらかにして、万民を大八洲にいつくしみ養った。大伴国道は国事をただし、藤原藤広と大和守を抜擢して国の守りに任せしめた。両公は益田池のことを点検した。ここで金費をもってこれにあてるに、土塊を引く馬が日に日に集ってき、車を走らす人と、計り事をめぐらす人が、夜な夜な集ってきた。車輪の音をとどろかせながら車馬は往き来し、男女は雷のようにすばやく仕

事を進め、土は雪の積るようにならずたかくなり、堤防はたちまち築かれていった。さながら霊神が粘土をこねあげて大炉を化生したようである。出来上ること僅かの年月であった。これを作った者は人であるが、これをあきらかにする者は造化の神である。益田池の状態は、岡寺を左にし、綏神天皇御陵、即ち白鳥の陵を右にする。大野の墓が南に聳え、畝傍山が北に峙つてい、久米寺が東北方にあり、宣化天皇の御陵が西南方に位置している。数多くの天皇の御陵が長く続くさまは虎がうづくまっているようであり、四方の長い丘は斜めに連つていて竜が臥しているようである。雲は松の梢に流れ、檜の木の下の水が岸に曲りこんだ辺に波うっている。春の花が池に映じて見る人帰ることを忘れ、秋の紅葉は林一面に開けて遊ぶ者は飽きない。おしどり、かもが水面を泳ぎ廻つてうたい、老いた黒鶴、白鶴がみぎわに遊んで舞い、亀が頸をのべ、鮒、鯉が尾を振っている。かわうそ、鳥も各々分を守っている。湖水を天に映し、重なる山の影がさかさまに映し、その深さは海のようにである。広さは淮水をこえ、昆明池も比較にならぬし、阿耨達池もこれに比べると小さい。虎がうそぶいて波を起すと、それが天に至り、竜がうなつて堤防を裂いても恐れはしない。水神もこの池を充溢することはできず、ひでの神もこの池を涸らすことはできない。この地方は水の潤いを受け、無数の流れが盛んに流れ出している。天皇が慶ぶ時は人民は之を受けて、喜びに舞つて豊年を祝つて自分の仕事を忘れる程である。しかし、いつこの池が変るかも知れないので碑銘を書くことを依頼された。才能はないのであるが、大事な頼みなので引き受けた。虚しい頭であるが文章を書いた。銘には次のように言っている。

天地の根元の萌しがなく、国の生まれることはなかったが、天地のはたらきが動き出し、生物の萌芽が見え、自然現象の八風がふるって五行が開かれた。

日月が運転し、山河がまじわり、多くの草木が連なり万物が生じてきた。ここに穀物が実りだしたことは、大海、益田池の水の潤いによるのである。

嵯峨天皇は淳和天皇に讓位して人民をいつくしみ、計略がよく、靈妙に功をなして潤すことは雨のようであり、人民を榮えさすことは温い春のようである。

みことのりが直ちに下つて、百官は仕事にとりかかり、紀氏と藤氏も開拓をはじめてその功は非常に大きく、平章事国道、藤原藤広らの考えがすぐれ、その方法がよく、万民はみななつた。

ここに益田池がある。人力によって掘つたが、成り立ったのは天力である。喜んで男人、女人、車馬が集り、完成には長い年月はかからなかった。

深く広く、青々としてみわたしても限りない。多くの沢の流れそそぐもとなり、魚や鳥が泳ぎ、竜がここに隠れている。

流れが溢れ、開拓された田が増え、よく働いて植え、苗がすくすくと育ち、収穫した。収穫した穀物が丘のように多く、国の守りも充分で、人民の生活も満足である。天下は和平で堯の世の中に何等のひげはとらない。

## 2. 益田池碑と変遷

人事を尽し、天祐によって人民を潤す益田池は天長2年(825)9月に完成した。六郡の水田をうるおす人工の大貯水池である。存在は、大和国高市郡白櫃村である。現在の櫃原市東池尻町、西池尻町、見瀬町にわたる地域一帯である。どれほど広い貯水池だったのかはつきりはしないが、当時としては一大国家的事業ではなかったろうか。空海の碑文を読むと稀に見る広大な池が出来たことになっている。中国の大湖に勝るとも劣らないものと記されている。誇張があるとは考えられが、それにしても小さなものではなかったであろう。

米作地帯にとって最も大事なものは水利である、自然の降雨にまかせていれば、限られた生産しか望めない。それを克服するには、水路の開発と貯水地の築造である。農政上、先人の傾倒した事業にはこれが多かった。それを9世紀に実現させているのである。益田池は、計画してから3年、開鑿してから2年余で完成している。そのことは、『日本紀略』に「十四年正月丙子新銭一百貫文を大和国に賜わり、益田池を築くにあつ。」とあることによってわかる。完成すると、記念碑の建立にかかり、空海に銘詞を依頼した。一体、益田池構築と空海はどんな関わりをもっていたのであろうか。このことは、碑文には一際書かれていない。しかし、四国に満濃池を構築した空海が全然関わらなかつたことは考えられない。嵯峨天皇の讓位があつたとしても、空海に何らかの意見を求めているのではないだろうか。

いつの代か、益田池の雄姿は、大和の国から姿を消してしまった。これは、空海の予言が適中しているのである。即ち、碑文の末尾に「蒼海の<sup>しばしば</sup>數變ずることを歎いて」とあるのである。人工的なものは、人工的なものによって変えられることが多い。益田池がなくなった理由は、水路の開発によるものではなかったろうか。貯水池の水は、一時的な利用に留ることが多いが、河川の水は恒久的利用が可能となる。従って、何らかの技術進歩によって適切な開鑿されると、溜池が必要なくなり埋没されてしまう。その例であったように思う。唯、誠に残念なことは、益田池完成の記念碑が折角建立されたのに、これまで破棄されてしまったことである。現在、台石のみの残存であって益田池碑は見る事が出来ない。せめて、大湖を失っても、碑だけ残っていれば、益田池の全容をうかがうのに益あったのではなかろうか。

### 3. 益田池碑の重建

一大事業完成の暁に、記念碑を建立されることは、世の多く取られたことであり、大きな意義をもつことである。

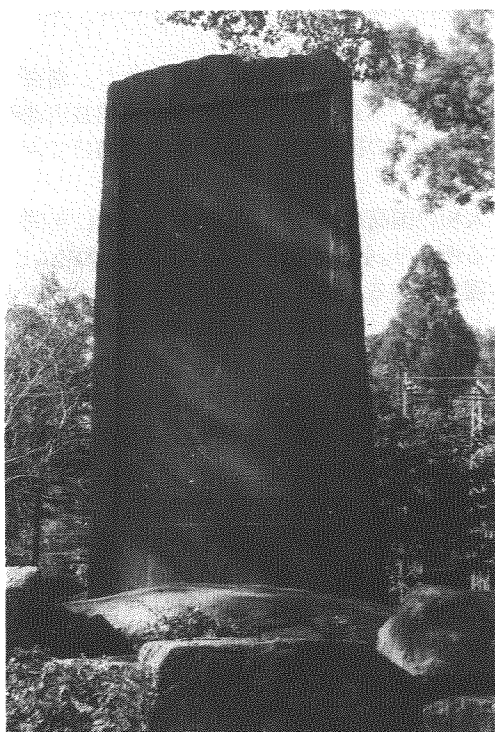
「天長二年歳在大荒玄月貳拾五建之池□上」と碑文の末尾にあるように、益田池碑は、天長二年九月二十五日に建立された。大きな碑である。横が9メートル、高さが8.1メートルの碑身である。こんな馬鹿でっかい碑を建てたことには驚きの外はない。一体こんな大きな石があったのであろうか。しかも人の力でこれほどの碑をどうして建てたものであろうか。まして、これをささえる台石は、小山のようなものでなければなるまい。しかし、益田池の広大さを考えると、碑も巨大なものでなければならなかったであろう。ここにも、国の大きな権力の加わっていたことを思わせるものがある。

さて、益田池が姿を消したのが早いのか、益田池碑が埋没したのが早いのかは分明ではない。多分、益田池が早く消滅したのであろう。益田池碑は残骸のように忘れられて残っていたのではないだろうか。四、五百年を経た南北朝時代、高取城築城のため破壊されてしまった。石垣に使われたともいわれている。為政者の権力が、いとも大事な文化遺産をあとかたもなく破滅させてゆく姿の表れである。唯、台石のみが益田岩船として巨大な姿を残している。その下に立つと、益田池の構

築が如何に雄大な営みであったかが思い知らされる。

しかし、後世益田池碑は重建された。橿原市久米寺の裏、木立深い処にである。重建益田池碑記は小牧桜泉の撰文であるが、参考に掲げてみる。

大和の国高市郡に旧益田池有り。弘仁年間に鑿する所なり。弘法大師空海撰する所の碑銘にして、性靈集に載る。池は何時湮するか知らず、碑また久しく廃す。今但存するは其の附石のみ。傳えて言う、往時高取城を築くに碑を毀して以て城垣と鑿す。寛政中白河侯松平定信、集古十種を刊す。其の碑銘の部に一雷字を載せる。是れは城垣残石の搨本に就くものなり。云うに高野山上智院所蔵の真跡に由る摹取は摹刻未だ精ならず。然るに益田池の故事は、是に由りてやや世に顕る。豊田翁新八なる者、郡の四条の村人なり。財を転んじ義を好む。常に故跡の湮するを慨く。意有りて表章の嘗に於いて工を募りて徧えに城垣を搜し遺刻の一字を索めるに獲るなし。是に於いて上智院真跡を以て諸石に上せんと欲す。翁来りて以て此の事を謀る。余すみやかに之を懇憑する。乃ち和歌山県沖知事を介して院の真跡巻を借りるを得て、図書寮員堀君博に会す。公事を以て南都に来る。君素より金石学に精し。大いに此の挙に賛す。自ら鉤攀の勞に任ず。又、為すに碑石に摹刻工を揀ぶ。嘗閱歳を経て成る。乃ち地を擇び諸を久米寺の兆域中に建つ。益田池の遺趾を距に、僅か数百武にして、碑文中のいわゆる来眼精舎是なり。大師の此の巻は、建碑の時の稿本と為す。或いはたまたまその所する書にして攷えるべからず。其の文辞典麗にして、字画瑰奇飛動、間に飛白体勢を雜えたり。今この所に建つに、鉤攀既に精にして、<sup>せん</sup>鑿工また工なり。たとえ原碑存して今に至らしめんも何ぞまた加うるべけんや。翁集賢するに辛苦奔走を惜まず、以てこの勝事を成す。千余年の旧跡を来らしめ、また大いに世に明らかにす。豈偉とせざるべけんや。況んや此の碑の記する所を考うるに、以て古人の講水の利の一端を窺い見、農政者の勸とすべし。豈特に名跡の存して尋覽に供すべしと云うべし。翁予に建碑の顛末を乞い、まさに以て勒石し碑の側に置かんことを。余あえて辞せず。翁の斯の挙を益助せしは、その令嗣新一、久米寺住職権中僧正有範師、少僧正乘本師、岡橋君治助、藤原君源兵衛、皆あずかつて有力に



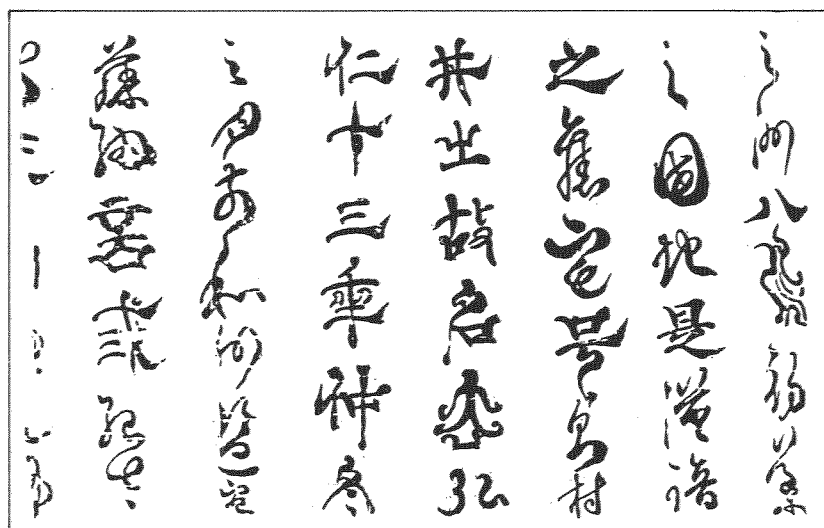
図版 I

つき、宜しく是を併記して記す。

益田池碑の消失を嘆いた豊田新八翁は、これの再建を意図し、辛苦奔走の末、明治33年、久米寺の境内に建立した。奇事なことであり、後世まで

残る立派な業績である。しかし、この再建益田池碑は、世人から強い注目を浴びていない。その理由はなんであるか。大きな理由は、この碑が天長二年建立の碑の復元そのものでないからである。高さが二丈七尺、長さが三丈余に達していた壮大なものではないからである。又、当時の碑の真の姿は窺えず、その面影を想起させるには不満足さが残っているからであろう。再建碑もたしかに大きい。しかし、往時のものには及びもつかない。次に考えられることは、再建碑のよところとなった高野山上智院所蔵の大師真跡が、空海の真跡とは認められず、模本と言われているからである。しかし残念ながら、益田池は決潰し、益田池碑も毀損してしまったからには、再建碑によって手掛りを得て、それに近づいてゆくことも一方法である。その意味から久米寺に存在するこの碑に心をむけてゆきたいものである。近鉄線樫原駅から久米寺はすぐである。寺院の裏手の鬱蒼たる茂みの中に再建碑は佇立している。さすがに碑石は大きい。しかし、台石がさして高くないし、石質の関係か古めかしくない。碑文の文字も石に深くくい入っている深淵さを欠いているように思えて残り惜しかった。

吾々とはかく過去を忘れがちである。当時の人々の辛苦も幻として片付けてしまう。その大きな恩恵も切実さをなくしてしまう。益田池碑銘を読んでも、重建益田池記を見ても、当時においてはかけがえのない大事な事業だったのである。「古



図版 II

人の講水の利の一端を窺い見、農政者の勸とすべし。」は無視できない大切な語である。「蒼海しばしば変ずることを歎いて」とは世の移転をなんと適格に予言したことか。(国版Ⅰ参照)

#### 4. 大和州益田池碑銘並序

ここで話を空海の手書である益田池碑の文字に移し、書道の立場から検討を加えなければなるまい。平安初期に空海が書した益田池碑は姿を消してしまっただが、幸いにもその模本が高野山に残っていた。明治33年の重建にもこれが用いられた。中央公論発行書道芸術第十二巻空海には

伝 空海

重要文化財 大和州益田池碑銘並序 (絹本) 1 巻

天長二年 (825)

絹本

28.3cm×111.5cm

高野山釈迦文院 和歌山県

とある。

問題は伝空海とあり、空海の手筆とは認められていないことである。模本であるとなると、気乗り薄くなる。余りにも脱字が多いことから当時の某人の臨模といわれるのであるが、さればとて空海の晩年の手筆は残っていない以上、空海のこの年代の手書を見極めるには、これに寄りなければなるまい。例い模本であるにしてもその姿に近付くことは出来る筈である。

益田池碑銘並序の模本は次のようなことが特質と考えられる。

1. 雑書体である。
2. 遊戯的な感を深くする。
3. 神秘性を秘めている。

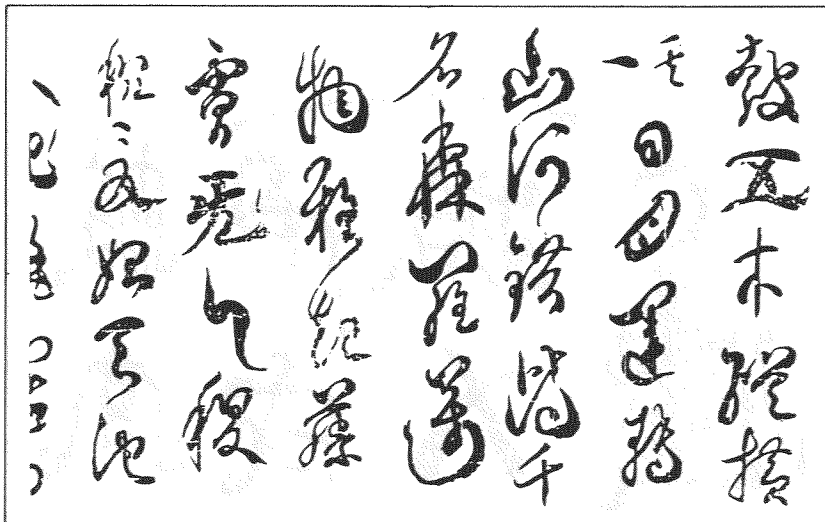
以上のことをもっと具体的につきつめてゆこうと考える。

##### ア. 雑書体

この作品は、奇態な表現が多く、書体にあてはめることは困難であるかも知れないが、現在吾々が考えている篆書、隸書、楷書、行書、草書に区分して見て、その他の体を特に選び出してみることにする。

| 書体 | 文字数 | 百分率  | 備考 |
|----|-----|------|----|
| 篆書 | 90  | 11%  |    |
| 隸書 | 35  | 4    |    |
| 楷書 | 5   | 1    |    |
| 行書 | 7   | 1    |    |
| 草書 | 655 | 81   |    |
| 他  | 17  | 2    |    |
| 計  | 809 | 100% |    |

まず、篆書について考えてみよう。この作品は篆書が主体になっているような印象が強い。しかし、篆書は約11パーセントとを占めるだけで大し



図版Ⅲ

て字数は多くないのである。しかし、主要部分、即ち表題とか年号とかが篆書で書かれている。書き出しと、しめくりが篆書によっていることが全文中、大きな重みをもたせているところである。尚、篆書は字形が大きく表現されていることも、目立っていてその存在感を大きくしている。篆書とはいっても純粹なものとは感じとれない。特に、普通ならば素直に止るところが奇妙な「ゆれ」をもっている。即ち、「飛白体」を多分にとり入れていることである。このことは、空海の以前に書かれた『真言七祖像贊』のあり方を思わせるところである。もう一つ感じさせることは、比較的隷体に近い書き方があり、波磔を取り入れていることである。従って、隷体との区別のつきかねることが多い。以上のことから、ここに表現されている篆書は、空海独特のものであり、言ってみれば、比較的読み易いものであり、やや俗っぽい篆書とも受け取り易いものをもっている。最後に近い部分の「天長二年歳在大荒落玄月貳拾五日建之」あたりにその特徴がある。(図版Ⅳ参照)

次に隷書について考えてみよう。これも中国漢時代の隷書のような明確な隷書ではない。というのは線質に隷書としての堅確さがないのである。線に躍りがあるのである。終筆が妙に跳ねたり、鈍重に止まったり、化粧が多すぎる飛白体の残滓が残ったりするのである。書体的にみて篆書なのか、草体なのかの曖昧さも少なくない。これを隷書として認めるかどうかも逡巡させられるものが

多々あるのである。その中から隷体に入れないと区分に困るものを隷書として取りだした。従って、その数は多くはない。僅か4パーセントに過ぎない。そして、明確に隷書と感じ取られるものも少ないのである。篆書と草書の間に隠れている存在である。その中で、年号とか数字の表記になると隷書に書かれることが多い。「弘仁十三年仲冬之月」の中に明確な隷意がみられ、線質も隷書の筆意をよく表している。(図版Ⅱ5行参照)

楷書として取り上げるものはほとんどない。字数に5とでているものは、やむを得ず楷書に入れたものであり、隷書が含まれているのであるが明確な波磔がなかったり、隷書としてのゆき届いた筆意のなかったものを楷書にしたのである。なぜ楷書が書かれなかったのであろうか。この頃の書写字体は、行書と草書であったのであろう。篆書、隷書は勿論のこと、楷書も事あらたまつた時以外は書かれなかったと見てよい。それは、実用的な書写は行書、草書が最適である。視覚的には楷書はよい。しかし、書写的には、楷書は不向きである。余りにも固苦しく、書写時間も多いためである。この『益田池碑銘文』は、特異性をもたせて表現しようとした。さすれば、篆書、隷書の方が楷書よりは特異性がある。そこで篆書によって奇異さを見せ、他の文の流れるところは、自由さの強調できる草書によった。そこに、楷書の表現はなかったのである。中国の初唐の書は、絶対的に優れた楷書が多い。それは、事あらたまつた碑文



図版Ⅳ



の書写だったからである。又、規範性を重要視した国策と楷書の合致があったからであろう。平安初期にはそのようなことはなく、ひたすら用としての書写であり、その中に美を求めようとした。行書、草書の中にも美を求めることは可能であったのである。唯、上奏文などには楷書表現があったことは窺われる。この碑の表記には、奇想的なものが望まれた。そこに、楷書はなかったのである。

行書についてであるが、これも楷書同様極めてその字数は少ない。草書に威圧された感がある姿を見せてくれない。7字を取り上げたが草体まで行っていないものを行書として区分しただけのことである。ただ、この行書は、どこか隷書があったり、篆書の終筆のあり方を含蓄していて、くどさというか、野暮ったさというか清澄さに欠けている。空海の中年の書の醇化された明澄さは失われているところに、趣を異にするところが多いのである。

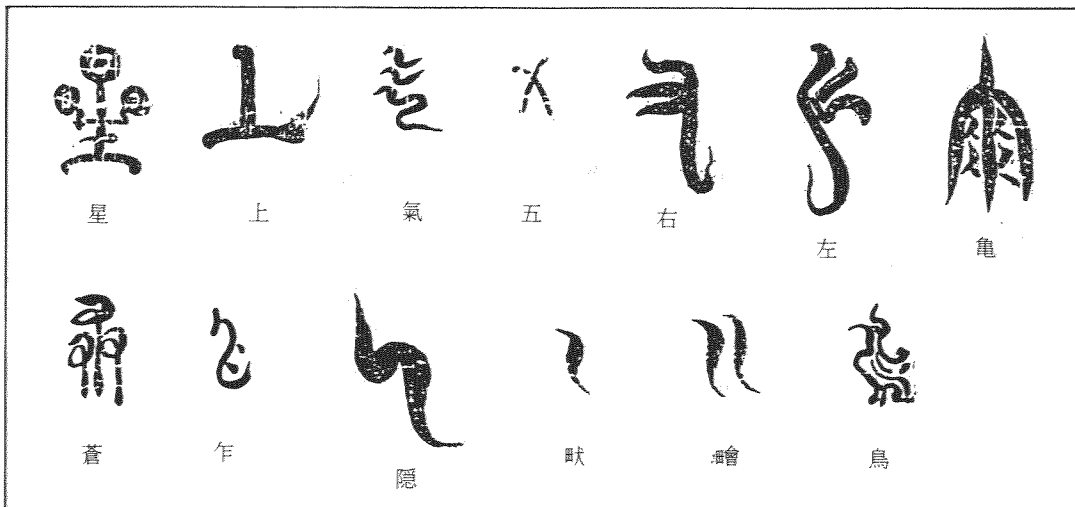
草書について当ってみると、この作品の大部分を占めるのが草書である。草書には、点画の省略、単純化した自由さがある。形態上からも束縛がない。変化と奇異さを求めるには好適であり、文字の大小にも思い切った変化を求めることが出来る。そのようなことから草書によったものであろうか、81パーセントの数を領している。文の前半で言えば、池の構築の進捗さには文章の流れの速

さを求めたものか、草書だけで書かれているし、後半で言えば、完成した池の雄大さや自然の描写にも草書が強く押し出され、銘の煮詰められた蟠りのない文章にも、これによって表現されている。

唯、書風には一種の臭気がある。装飾性というか、誇張性というか、不必要かと思われる余剰なものが纏いつくのである。このようなことは、空海書の『崔子玉座右銘』にもあった。しかし、『崔子玉座右銘』からは、鼻につく臭気は感じられなかったのであるが、これにはそれが多い。やまっ気とでもいうものであろうか。

さて、残ったものがある。17字の他の文字である。そのことについて述べてみたい。

この、その他の書体の文字であるが、二分すると、古文から考えられるものと、全然古文から考えられぬ不可思議ともいべきものとに分けられる。「星」は金文、古文に見られる。「上」は、説文古籀にあり、やや時代が下った「天孫神讖碑」に見ることが出来る。「氣」は説文にそれらしいのがあり、明の王鐸はこのような書き方を見せている。「五」は古文、金文に見られる。「左」「右」は、金文、石鼓文に似たような書き方が見られるが完全ではなく、下辺の「工」「口」が欠けている。「龜」は、垂敦、積古に似たものがあるが、やや変形である。「蒼」はどれによったか全く不明である。「乍」は、草体から考えられないこともないが不可思議な表現であり、「隱」は全くわからない。「吠」は、説文に部分的に共通点もあるが、ここまで簡略さ



図版 V

れたことはつかめないし、「贍」も同様である。「鳥」は、説文、篆文に多く見られるあり方で目新しくはないが、この表現はより象形的で絵画的色彩が濃厚である。この他に不可思議な文字があって判読に苦しむものが最後に見られる。(図版V参照)

以上を考えると、空海の独自の文字が表現されているということが出来る。勝手に書いたといってもさしつかえがない。文字を神秘化した表現ではなかろうか。

#### イ. 遊戯的表現

この書からは、書としての高さを感じ取ることは少い。気韻を感じさせないで、唯奇妙さのみが目につくのである。空海の商品『真言七祖像贊』にもこの傾向があったにしても、これには気品と尊厳さがあって嫌味は感じないのである。これは、空海の商品でなしに、他の者の模本であるからこのようになったものであろうか。この気品を感じさせないで、多彩な表現をふりかざしたところに遊戯的感触を受けるのである。文字の大きさの差異であるが、これも甚だしいと感じさせる変化を見せるのである。意のままに腕を揮ったので、差がつくのはもっともなことであつたにしても、全体的に締りを欠くところまでいっている。なぜやりさを感じないでもない。とすれば、興にまかせての戯れとも受け取られかねないのである。随分酷な評となつたが、空海の商品として見る以上、どうしてもそのような性情を感じさせないではいられないのである。

#### ウ. 神秘性の表現

これほどまでの多くの書体を混入して書かれた『益田池碑銘』の真髓は一体何であつたらうか。

もう一度、空海の商品に対する志向を考えてみなければなるまい。

一大事業である益田池の完成をみた。庶民の恩恵はいかばかりであつたらうか。彼等は欣喜雀躍した筈である。この偉業を銘詞に残すとき、空海は「書」を単なる文字の羅列としてではなく、自己の心情を飛散させる宗教的境地に立つたのではなかろうか。文字に対する全智を傾け、古文、篆書、隸書、楷書、行書、草書とあらゆる書体を介させ、この銘詞が世を救うこととなることを祈つたのであろう。そこには、無碍の境地で、「書」の表現が現出されたものであろう。これほどまでの自在な書き方は他に類がない。神秘性が秘められ、宗教化されたものと考えざるを得ない。

### 5. おわりに

益田池碑銘は、研究家の異論を多大に含む「書」である。あまりの神秘性に匙を投げ出すかも知れない。末尾の解説不明の書き方などには、「書」としての位置を見失うところである。しかし、空海が称えた「書は散なり」の言を想起して再考してみてもどうであらうか。これが模本でなく、真跡の相を見せてくれれば、どんな性情を露呈したであらうか。遊戯的と見られる底には、確固とした品性が存在したのではなかろうか。従つて、現在見うる「益田池碑銘」の中から、宗教性を抽出してみたいものとする。天長2年といえ、空海52才でまさに老境の域に達していた。東寺の講堂も完成し、真言宗も確固たるものに至っている。空海は宗教的境地から筆を執つた。そして、「書」についての心情を余すところなく發揮したのがこの書である。

## A Study on Kūkai's Calligraphy

Tetsuo SUDA

As to Kūkai's handwriting, a fair amount of direct and indirect data has been handed down and preserved and is now available enough to trace the process of his calligraphy. And From old times lots of treatises have been published regarding Kūkai's calligraphy and the value of his calligraphic works.

The purposes of this paper are (1) to examine the extant calligraphic works of Kūkai, (2) to treat of the process of his calligraphy and the value of his works on reference to the critiques of all ages regarding his calligraphy, and (3) to study the wide influence which his style of calligraphy has had down the ages.